

【活動報告】

ジェンダーと科学研究会 2024 年度活動報告

岡本 隣¹、渡部慶音、江連千佳、大橋一平

研究会の目的と開催の経緯

本研究会の目的は、ジェンダー学やフェミニズムの視座から科学、知識、技術のあり方を検討するとともに、関連分野に関心を持つ学生同士の交流を図ることである。科学、技術、知識に関するいかなる研究を行う上でも、ジェンダーやインターセクショナリティの観点を取り入れ既存の枠組みや手法を精査することは不可欠である。同様に、セックス／ジェンダーの構築性やジェンダー間の社会的な格差、女性やマイノリティの抑圧について考える際にも、科学的とされてきた知見の正当性や、技術・知識の偏在を問い直すことが必要となる。

日本において、ジェンダーと科学に関係する研究はこれまで様々な分野で行われてきたものの、それぞれの専門的知見や研究を共有したり深めたりする機会は非常に限定的であった。フェミニスト科学論・科学哲学の基礎的な文献も、体系的に紹介されてきたとは言い難い状況にある。これらを踏まえ、本研究会では2024年6月以降月に1度の研究会と不定期の読書会を開催し、ジェンダーと科学に関する基礎文献や論文の購読と、希望者による発表を行ってきた²。運営においてはグランド・ルールを設け、全てのメンバーが対等かつそれぞれの安心できるやり方で参加・発言できるよう心がけている。また、研究会としてあらゆる属性の個人や集団に対する差別に反対する。

活動状況

1 本研究会に関する問い合わせは岡本まで。Email: okamoto-512@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

2 本研究会の名称は、2022年度まで科学史・科学哲学研究室所属の大学院生を中心に同名の研究会を主宰されていた杉本光衣氏より引き継いだ。旧「ジェンダーと科学研究会」の活動内容については、2022年4月発行の『科学史・科学哲学』第25号を参照のこと。

2025 年 1 月現在、科学史・科学哲学研究室及び科学技術社会論コースに所属する大学院生・学部生を中心に、東京大学その他研究科・学科所属の学生、一橋大学や京都大学等他大学所属の学生など、科学、技術、知識とジェンダーの関係に関心を寄せる学生約 20 名が参加する。

本年度は、基礎文献として *The Oxford Handbook of Feminist Studies* (2016)、*Feminist Epistemology and Philosophy of Science* (2024)、『ジェンダード・イノベーションの可能性』(2024)、*Only Natural: Gender, Knowledge, and Humankind* (2022) などの一部を扱った。基礎文献と合わせて、参加メンバーの投稿論文の検討や、研究発表などを行った。研究会内部の希望者で、定例の研究会とは別に不定期の読書会も開催した。

以下は、講読文献の内容紹介・書評、研究発表内容の概略である。

文献紹介・書評

【文献紹介】

Roy, D. (2015). “Science Studies.” Lisa Disch, and Mary Hawkesworth (eds), *The Oxford Handbook of Feminist Theory*, Oxford Handbooks, 832–851.

本文献は、分野横断的に展開してきたフェミニズム科学論の潮流のなかに、存在論的、認識論的、倫理的シフトを見出す。1970 年代以降の女性運動のなかでは、女性科学者の少なさが取り上げられた。加えて、白人男性やオスの動物のみをモデルしてきた生物医学研究の問題点も指摘された。科学史家ロンダ・シービンガーによる「ジェンダード・イノベーション」はその是正の試みの一つである。これらの展開は重要であるものの、性別や人種ごとの差が誤って因果関係と捉えられる懸念や、生物学的性 (sex) を自明とすることの問題点も指摘される。そこで、フェミニスト理論家のダナ・ハラウェイや哲学者ロージ・ブライドッティにも連なる理論的潮流であるニューマテリアリズムは、物質性に再び光を当てることで自然と文化の二項対立を克服しようと試みる。こ

の試みは、人間だけではなく非人間の行為主体性にも波及する。そこで重要になるのは、これまでフェミニズム科学論でも問われてきた知識の状況性 (situatedness) や倫理である。以上のように本文献からは、フェミニズム科学論が科学、アクティビズム、アカデミズムの中から生まれたフェミニスト的問いによって形作られ、価値中立的とされてきた科学のあり方を再考してきたことが分かる。特に直近の潮流では、個別具体的な状況や倫理に根ざした認識論や存在論による科学や知識生産が志向される。(岡本隣)

【文献紹介】

Antony, L. (2022). "Quine as feminist: The radical import of naturalized epistemology." *Only natural: gender, knowledge, and humankind*. Oxford University Press, 17–64.

本文献は、米国の分析哲学者クワインによる「自然化された認識論 (naturalized epistemology)」、つまり自然科学の知見を応用した認識論が「フェミニスト認識論」の資源として有用であることを提示する。フェミニズム科学論・科学哲学は、客観性とは価値中立性であるというイデオロギーを否定するために、知識の男性中心的なバイアスを暴くと同時に、女性をはじめ社会的に周縁化された人の価値を優先することを肯定してきた。しかしここには、ある種の不公平さを重視しつつ別の不公平さを糾弾するという、「バイアスのパラドクス (The "Bias" Paradox)」が見られる。このパラドクスを解決するには、バイアスの善悪がいかに区別できるのかを明らかにすることが必要である。アントニーは、バイアスの善悪を判断する上で分析哲学の提示する認識論の自然化が役立つと主張する。分析哲学はフェミニスト科学論において、誤解や過度の一般化に基づき批判されてきたものの、バイアスを自然科学と照らし合わせることでその正誤を適切に評価できるという利点がある。自然科学の知見から正しいと言えるバイアスが良いバイアスだと考えると、バイアスの重要性を踏まえた上で、ある種の悪いバイアスを批判することができる。アントニーによると、「フェミニスト認識論はまず正しい認識論でなければならない」。「正しさ」の指標と

して自然科学を用いることができるという彼女の議論には説得力があり、フェミニスト認識論の強力な拠り所となるだろう。(渡部慶音)

【研究発表】

「フェムテックを通した女性活躍推進政策による新自由主義的母性の拡大」

ジェンダー学やフェミニズムの視点から科学技術のあり方を検討するという本研究会の目的に照らすと、「女性のための技術」とも称されるフェムテックの台頭は近年特に注視すべき現象であるといえるだろう。「フェムテック(Femtech)」とは、「女性(female)」と「技術(technology)」を掛け合わせた造語であり、2016年にドイツの起業家であるイダ・ティンによって生み出された。フェムテックを標榜するサービスには、月経、セクシュアルヘルス、妊娠、不妊、更年期など主に女性に関わるとされる健康課題に技術を用いてアプローチするものが含まれる³。医療分野で女性の健康が軽視されてきた歴史を踏まえ、フェムテック市場の興隆は、医療分野や技術分野における性差別への対抗の成果としても重要な立ち位置を占める⁴。その意味で、フェムテックはフェミニズム的な視点から出発したものと捉えることもできる。一方で、日本ではフェムテックが経済成長を目的とした女性活躍推進政策の一部として取り込まれており、「女性のための技術」というより、むしろ女性たちに新たな性役割を要求し、強化する技術になっている可能性がある。

研究会では、江連(2024)におけるフェムテック市場の分析や考察から、日本においてフェムテックが政策的関心の対象となっている状況について問題提起し、参加者とディスカッションを実施した⁵。議論の中では、海外の事例との比較を通じて、日本におけるフェムテックの特異性が浮かび上がるとともに、

3 Corbin, B. (2020). Digital Micro-Aggressions and Discrimination: FemTech and the 'Othering' of Women. *Nova Law Review*, Vol. 44, 2020.

4 Wiederhold, B. K. (2021). Femtech: Digital Help for Women's Health Care across the Life Span. *Cyberpsychology, Behavior, and Social Networking*, 24(11), 697–698.

5 江連千佳. (2024). フェムテックを通した女性活躍推進政策による新自由主義的母性の拡大. 情報処理学会第86回全国大会講演論文集, 2024(1), 887–888.

科学技術と政策の結びつきによって「生」がどのように管理・統制されていくのかという点について、違和感や懸念が共有された。特に、フェムテックの技術が個人の健康や選択の自由を拡張するのではなく、むしろ国家や市場の論理に沿った形で女性の役割を規定し、特定のライフコースを推奨する方向に働く可能性について、活発な議論が展開された。(江連千佳)

【書評】

Crasnow, S., & Intemann, K. (2024). *Feminist Epistemology and Philosophy of Science: An Introduction*. Taylor & Francis.

本書はフェミニスト認識論とフェミニスト科学哲学に関する包括的な概説書である。本書の著者であるシャロン・クラスノウはノルコ大学の哲学教授であり、クリスティン・インテマンはモンタナ大学の科学・テクノロジー・倫理・社会センターの教授である。両者ともフェミニスト認識論、科学哲学において第一線の研究者であり、多くの論考を執筆している。また本書の著者たちは *The Routledge Handbook of Feminist Philosophy of Science* (2021) の編者でもあり、本書は同ハンドブックに入門するためのものとも位置付けられるだろう。本書のそれぞれの章の終わりには読書案内として同ハンドブックの対応する章が挙げられている。

まず第1章において、フェミニスト認識論、科学哲学とは正確には何であり、なぜそれらが重要であるのかについて、それぞれの章立てと対応する6つの問いが挙げられている。

- 知っているのは誰なのか？ (第2章)
- 何についての知識を私たちは有しているのか？ (第3章)
- どのように知るのか？ (第4章)
- 私たちは何を知らないのか？ (第5章)
- 知るといえることはなぜ重要なのか？ (第6章)
- どのようによりよく知ることができるのか？ (第7章)

本書の特徴の1つは、これらフェミニスト認識論と伝統的認識論・科学哲学とが共有する問いの下、両者の方法論や概念が対比される点である。フェミニスト認識論は、伝統的な認識論・科学哲学において知識の対象に関心が偏り、知識主体に焦点が当てられてこなかったことや、価値中立的な客観性という概念の妥当性を問題にしてきた。そして著者によればフェミニスト認識論は、知識の対象がどのように知られるのかということに関して知識主体がどのような重要性を持つのか、科学は「客観的」なのか、そしてそれはどのような意味においてなのか、またどのようにして知識の生産からバイアスを特定し、取り除くことができるのか、といった問いをジェンダーやそれと交差する要因から分析している。

ではフェミニスト認識論における「フェミニスト」とはどのような含意を有しているのか。本書はフェミニスト認識論を論じる上で、「フェミニスト」という語を、世界を男性と女性という非対称な社会的役割を持った2つの階級へと分割する諸規範に基づいた抑圧的な諸構造を終わらせようとする是正的な立場として規定した上で、以下のさらなる「コミットメント」を持つものであるとしている。

第一：フェミニズムは、権力が不平等に分配されており、そしてジェンダーがその不平等な分配に影響を与える社会的な要因の1つであるという認識から生まれている。

第二：フェミニストは、この権力の不平等な分配を通じて、社会構造や制度がどのように形作られているかをさまざまな仕方で検証することに尽力する。

第三：フェミニズムは、その核において、平等な目標の達成を妨害する構造の改善に尽力する政治運動である。

第四：女性の抑圧を終わらせることは、より一般的にあらゆる形態の抑圧を終わらせることと不可分である。

フェミニスト認識論は、このようなフェミニスト的態度ないし関心が認識論

的に重要であるという認識の下、社会における知識生産の分析や不正義の是正を試みようとする学問である。次に各章ごとに扱われているトピックを紹介しよう。

第2章では、伝統的認識論において軽視されてきた知識主体の認識論的な重要性（知識主体とは誰なのか、知識主体はどのような特徴や能力を持つべきなのか）に焦点が当てられる。そこで重要となるのが「状況に置かれた知識」という考え方である。状況に置かれた知識とは、知識が社会的に位置付けられ特定のアイデンティティを持った知識主体によって獲得されるのであり、知識生産は常に社会的で局所的なものであるという主張である。それゆえ知識生産は、信頼や証言の交換といった形で他の知識主体に依存している。第2章ではこのような認識的な協働がどのような社会規範の下でなされているのかが解説される。

第3章では、伝統的に価値中立的な形で前提とされてきた「客観性」概念が再検討される。具体的には、従来論じられてきた客観性を三つの側面（行為者の、存在論的、方法論的）から特徴づけ、知識の状況性を強調するフェミニスト認識論が主張する状況に置かれた客観性概念と対比される。フェミニスト認識論において客観性は、それが問題とされる社会的文脈から独立していない。それゆえ客観性が、社会的・政治的文脈の中でどのように特定の関心に基づいたりサーチクエスションや探究を支える概念に依存しているのかが問題とされる。

第4章では、前章に引き続いて、価値中立的な客観性に対する批判がなされ、フェミニスト認識論の観点からいかに客観性概念が再構築されるのかが検討される。この章では科学的探究が9つの段階に区分され、ジェンダー規範を含めた社会的価値や規範が探究のどの段階で影響をもたらすのかが具体例を挙げつつ問題にされる。その上で、客観性概念の再構築の試みとして、3つの試み（文脈的経験主義、スタンドポイント理論、フェミニスト全体論的経験主義）が紹介される。

第5章では、これまでの知識獲得の問題に対して、知識生産において能動的に維持されている「無知」が問題とされる。近年本邦でも紹介が進んでいる

「無知学」(プロクター、シービンガー)⁶や「無知の認識論」(トゥアナ、ミルズ、スペルマン等)⁷を包括的に紹介しつつ、「無知とは何であるか」「無知はどのように生じるのか」「無知はいつ問題あるものとなるのか」といった問いの下、単なる知識の欠如としては説明できない、無知が科学的実践の中で構造的に維持されるメカニズムが検討される。

第6章では、私たちが何を知るのか、どのように知るのかという問題が認識論的に重要なだけでなく、倫理的・社会正義の観点からも重要である点に焦点が当てられる。具体的には、近年様々な形で論じられてきた認識的不正義(証言的不正義、貢献的不正義、解釈的不正義、参入における不正義、認識的信頼に関する不正義、認識的盗用等)の議論を整理しつつ、それらの認識的な害と社会的害が検討される。

第7章では、「どのようによりよく知ることができるのか?」という題にあるように、フェミニスト認識論の方法論が、いかに明示的もしくは非明示的に知識生産や知識探求を促進することを助けるのかが論じられる。そこではそもそも「よりよく知る」とはどのようなことなのかが問われ、本書のまとめとして6つの主張が挙げられている。

1. 「何が知られるのかと知るのは誰なのかという問いは互いに絡み合っている」
2. 「私たちは知識のために互いに依存しあっている」
3. 「多様性は認識的共同体において重要な役割を果たす」
4. 「よりよい知識はフェミニスト的価値を含んでいる」
5. 「科学は客観的でありうる(しかし、おそらく私たちが考えていたようなものではないかもしれないが)」
6. 「認識論は倫理と相互に結びつきあっている」

これらの主張はフェミニスト認識論の独自性を強調しているだけでなく、よ

6 無知学の主要な論集として、Proctor, R. N., & Schiebinger, L. (2008). *Agnotology: The making and unmaking of ignorance*. Stanford University Press. また、Kourany, J., & Carrier, M. (2020). *Science and the Production of Ignorance: When the Quest for Knowledge Is Thwarted*. MIT Press. がある。

7 例えば、Tuana, N. (2004). Coming to Understand: Orgasm and the Epistemology of Ignorance. *Hypatia*, 19(1), 194–232. や Sullivan, S., & Tuana, N. (2007). *Race and Epistemologies of Ignorance*. SUNY Press. を参照のこと。

りよい知識探求・知識生産をめざすという認識論一般の目的にとって重要な貢献をなすものでもある。

以上、本書の構成を概観してきた。本書は近年のフェミニスト認識論と科学哲学の文献を包括的かつ簡潔に整理し、読者がこの分野に参入するにあたって最良の入門書となっている。本邦でもミランダ・フリッカーの認識的不正義⁸や無知学⁹が紹介され関心を集めているが、本書はその理論的な背景を検討し、議論を発展させていく上で非常に重要な入口となるものである。フェミニスト認識論は主流の非フェミニスト的な分析認識論において現在もなお十分にに取り上げられているとはいえない。またしばしば社会における特定の現象を説明するための「応用的な」認識論として扱われている。しかし本書を読めば、社会的価値や知識の状況性を重視するフェミニスト認識論の方法論が、認識的不正義の問題だけでなく、現実の社会における知識生産のメカニズム一般を分析する社会認識論としていかに重要であるかが理解されるはずである。

(大橋一平)

8 フリッカー以後の認識的不正義論の包括的な紹介として、佐藤邦政・神島裕子・榊原英輔・三木那由他編『認識的不正義ハンドブック：理論から実践まで』勁草書房、2024年が出版されている。

9 無知学に関する最初の概説書として、鶴田想人・塚原東吾編『無知学への招待——〈知らないこと〉を問い直す』明石書店、2025年が出版されている。